

### 住居の形態

住居に関しては、4LDK 以上の家に住む人が、サンプル合計の 13.8%である。2LDK/3DK の家に住む人の割合は 32.8%と高い。

ローマ側の表では、回答者の 12.3%が一行目のタイプ（4LDK 以上）に分類される。2LDK/3DK の家は 34.3%である。

ペッチョリでは、回答者の 17.9%が 4LDK 以上の家に住んでいる。2LDK/3DK の家は 28.6%であり、3LDK/4DK の家に住む人の割合も比較的高い(27.4%)。ローマで 3LDK/4DK の家に住む人の割合は、ペッチョリと比較すると非常に低い。

| あなたの家にはいくつの部屋がありますか？ | 回答者 | %     |
|----------------------|-----|-------|
| 4LDK 以上              | 44  | 13, 8 |
| 3LDK/4DK             | 64  | 20, 0 |
| 2LDK/3DK             | 105 | 32, 8 |
| 1LDK/2DK             | 62  | 19, 3 |
| 1DK/ワンルーム            | 33  | 10, 3 |
| 無回答                  | 12  | 3, 8  |
| 回答者数合計               | 308 | 96, 2 |
| サンプル合計               | 320 | 100   |

図表 17 住居の部屋数 (サンプル合計)

| あなたの家にはいくつの部屋がありますか? | 回答者 | %    |
|----------------------|-----|------|
| 4LDK 以上              | 29  | 12,3 |
| 3LDK/4DK             | 41  | 17,4 |
| 2LDK/3DK             | 81  | 34,3 |
| 1LDK/2DK             | 47  | 19,9 |
| 1DK/ワンルーム            | 29  | 12,3 |
| 無回答                  | 9   | 3,8  |
| 回答者数合計               | 227 | 96,2 |
| サンプル合計               | 236 | 100  |

図表 17a 住居の部屋数 (ローマ)

| あなたの家にはいくつの部屋がありますか? | 回答者 | %    |
|----------------------|-----|------|
| 4LDK 以上              | 15  | 17,9 |
| 3LDK/4DK             | 23  | 27,4 |
| 2LDK/3DK             | 24  | 28,6 |
| 1LDK/2DK             | 15  | 17,9 |
| 1DK/ワンルーム            | 4   | 4,8  |
| 無回答                  | 3   | 3,6  |
| 回答者数合計               | 81  | 96,4 |
| サンプル合計               | 84  | 100  |

図表 17b 住居の部屋数 (ペッチョリ)

### 調査に参加した高齢者による自由コメント

次の表には、アンケートによってわかった心配事や困っていることを、簡単に記した。これらは、高齢者が述べた頻度の高いものである。

表をみればわかるように、二つの地域に共通する悩みは、健康、老化、そして、年金の少なさである。

| ローマ          | ピッチョリ    |
|--------------|----------|
| ↓ 若者の将来      | ↓ 年金の少なさ |
| ↓ 病気         | ↓ 老化     |
| ↓ 老化         | ↓ 孤独     |
| ↓ 無関心と感受性の欠如 | ↓ 死      |
| ↓ 渋滞         | ↓ 健康     |
| ↓ 公的交通手段の欠如  |          |
| ↓ 駐車場        |          |
| ↓ 価値の欠如      |          |
| ↓ 年金の少なさ     |          |

### 結語

これらのデータから浮かび上がるのは、初等/中等教育を受けた、配偶者と暮らし、市内中心地や近所に出かける高齢者のイメージである。

初等教育のみの人の割合は、ローマが 40.9%であるのに対して、ピッチョリのサンプルでは 75%と高かった。

このことは、ピッチョリの高齢者が仕事として農業に従事している可能性がより高いということ以外に、ピッチョリのサンプルは年齢の高い人の割合がより高いという事実にも依存しているかもしれない。実際、65才未満の回答者はピッチョリでは6%に過ぎないの対し、ローマでは 31.8%にも上る。また、ピッチョリでは、大学を卒業した人の数が少ない。

同居者の数に関しては、二つの地域に大きな本質的な違いはなかった。

ローマの高齢者は、どちらかといえば、散歩や買い物のために近所に出かける。かなりの割合の高齢者が、高齢者センターに通っており、間違いなく、非常に強力な集合ポイントとなっている。実際、この施設は、ローマ市内で大いに発達しており、非常に多くの高齢者を迎え入れて、カードゲームから踊りまで、グループによるリクリエーション活動がおこなわれている。

ペッチョリの高齢者も、市街中心地や近所に出かける。農業地帯において近所（地区）という表現はまったく不適切ではあるが、高齢者が出かける理由は、ローマの高齢者と変わらない（散歩と買い物）。

年金の月額については、1,000ユーロを下回る年金の給付を受ける人の割合が、ローマに較べペッチョリでは非常に多い。ローマで1000ユーロ以下の年金を受け取る人の割合が33.9%出あるのに対し、ペッチョリでは回答者の73.8%に上る。

これは、間違いなく、インタビューを受けた多くの高齢者、特にサンプルの25.9%を占める一人暮らしの人にとって心配事である。

テクノロジーの利用はわずかである。とくに、携帯電話のショートメッセージ(SMS)、コンピューター、それにFAXの利用が少ない。

こうした状況は、二つの地域に共通しているが、ペッチョリにおいては、30.7%の人が携帯電話を所有していないと答えたのに対し、ローマでは9.6%までその割合が下がることは指摘しておくべきだろう。

家事、買い物、お使いをしてくれたり、話し相手になって気を慰めてくれるような機械やロボットへの関心は多くない。

補足

以下は年齢グループ別の統計を反映した表である。

| 誰の介護を受けたいと思いますか? | 65歳未満 | 65-69 | 70-74 | 75-79 | 80-84 | 84超 | 全体  |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-----|
| 配偶者              | 51%   | 56%   | 39%   | 46%   | 13%   | 29% | 45% |
| 同居の子             | 13%   | 3%    | 11%   |       | 27%   | 29% | 9%  |
| 同居の子の配偶者         |       |       |       |       |       |     |     |
| 同居していない子         | 7%    | 24%   | 18%   | 31%   | 33%   | 29% | 20% |
| 同居していない子の配偶者     |       |       |       |       |       |     |     |
| 兄弟または姉妹          | 5%    | 2%    | 4%    | 3%    |       |     | 3%  |
| その他の親族           | 2%    | 2%    | 4%    | 6%    |       |     | 3%  |
| 住み込みの介護者、看護師     | 16%   | 7%    | 16%   | 6%    | 2     | 14% | 12% |
| 老人ホーム            | 5%    | 2%    | 4%    |       | 7%    |     | 3%  |
| その他              | 2%    | 5%    | 7%    | 9%    |       |     | 5%  |

図表 18-年齢層別集合（サンプル合計）（図表 7 の発展）

| 誰の介護を受けたいと思いますか? | 65歳未満 | 65-69 | 70-74 | 75-79 | 80-84 | 84超 | 全体  |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-----|
| 配偶者              | 51%   | 56%   | 39%   | 46%   | 13%   | 29% | 45% |
| 同居の子             | 24%   | 21%   | 27%   | 16%   | 38%   | 5   | 25% |
| 同居の子の配偶者         | 4     | 45%   | 31%   | 34%   | 13%   | 13% | 36% |
| 同居していない子         | 9%    | 3%    | 8%    |       |       | 25% | 6%  |
| 同居していない子の配偶者     |       |       |       |       |       |     |     |
| 兄弟または姉妹          | 5%    | 14%   | 12%   | 31%   | 25%   | 13% | 13% |
| その他の親族           |       |       |       |       |       |     |     |
| 住み込みの介護者、看護師     | 4%    | 2%    | 2%    | 3%    |       |     | 3%  |
| 老人ホーム            | 1%    | 2%    |       |       |       |     | 1%  |
| その他              | 11%   | 7%    | 12%   | 6%    | 13%   |     | 9%  |

図表 18a-年齢層別集合(ローマ) (図表 7 の発展)

| 誰の介護を受けたいと思いますか? | 65歳未満 | 65-69 | 70-74 | 75-79 | 80-84 | 84超 | 全体  |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-----|
| 配偶者              | 25%   | 54%   | 32%   | 63%   | 10%   | 33% | 37% |
| 同居の子             | 25%   | 0%    | 11%   | 0%    | 40%   | 0%  | 12% |
| 同居の子の配偶者         | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%  | 0%  |
| 同居していない子         | 0%    | 46%   | 21%   | 13%   | 30%   | 33% | 26% |
| 同居していない子の配偶者     | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%  | 0%  |
| 兄弟または姉妹          | 0%    | 0%    | 5%    | 0%    | 0%    | 0%  | 2%  |
| その他の親族           | 0%    | 0%    | 11%   | 25%   | 0%    | 0%  | 7%  |
| 住み込みの介護者、看護師     | 50%   | 0%    | 16%   | 0%    | 20%   | 33% | 14% |
| 老人ホーム            | 0%    | 0%    | 5%    | 0%    | 0%    | 0%  | 2%  |
| その他              | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%    | 0%  | 0%  |

図表 18b-年齢層別集合（ペッチョリ）（図表 7 の発展）

### 3. 参考文献

- (1) 宮崎理枝, 2005『イタリアにおける高齢者とその社会活動の状況などについて』,  
団地居住高齢者研究会セミナー : pp. 1-38

## 第7章 大都市近郊地域における高齢者の社会参加

### 1. はじめに

現在の日本における高齢化は、関連した問題・課題を把握する政策的・学術的試みが、さかんに行われている。高齢者による地域活動やボランティア活動といった、いわゆる社会参加に関する議論も、その一部である。本稿は、高齢者に対する聞き取り調査をもとに、高齢者の社会参加の現状を把握し、抽象的な命題を提示したい。

高齢者の社会参加と健康の関係は、これまでさかんに議論されてきた。概して、社会参加を積極的に行う高齢者のほうが、そうでない高齢者よりも健康状態がよいという知見が主流である（例：近藤・鎌田 2004、斎藤ほか 2005）。この点で、社会参加を促進させる動きは学術的・政策的に注目される意義があるといえる。

本稿で対象とするのは、大都市近郊地域に居住する、主として前期高齢者に関する社会参加である。それらの地域はニュータウンとも呼ばれ、戦後になって時期を同じくして大量入居が行われた（参考：福原 1998）。そのため、大多数の居住者が同世代であり、現在では住民の大半を高齢者が占めるようになっている。主に、都心に通勤するサラリーマンとその家庭（核家族）による地域社会である。こうした地域は、都市部の下町や農村部とはまた違ったかたちで高齢化を経験している。

本稿では、こうした都市郊外に居住する高齢者の社会参加について、複数箇所における共通要素を抽象化する。ただし、行政サービスに受動的に参加するケースではなく、自分たちで築き上げる能動的なケースに注目する。具体的には、町内会や老人クラブ、老人ホームといった既存の公共団体・施設ではなく、NPOやボランティア団体など「民間の力」によって設立・運営がなされているものである。これらは近年さかんになりつつあり、社会的にも注目されている。こうした試みは、その必要性にかかわらず研究蓄積がまだまだ少なく<sup>i</sup>、本稿の主旨は先駆的議論を提示することにある。

### 2. 大都市近郊の高齢者の様相

大都市近郊に居住する高齢者は、いくつかの点で特徴的と考えられる。まず、彼らの現役時の日常生活である。定年退職を迎えるまで、多くが都心で働くサラリーマンだった。彼らは高度成長期の中で壮年期をすごし、残業に次ぐ残業で、休日出勤も珍しくない生活を数十年間続けた。



このような高齢者（特に男性）が、現在では都心に通わず、地域社会で日常を過ごすようになっている。しかし、定年退職後に初めて地域の人たちと仲良くしようと思っても、なかなかうまくいかず、彼らには地域で親しい人脈がきわめて少ない（植村・斎藤 2005）。これは都市の下町や農村部のコミュニティとは様相が異なる。

また、こうした高齢者たちは、職場で論理や効率が追求されたためか、無駄話や非論理的なコミュニケーションに対し十分に慣れていない。それは企業社会ですごした者には当然の習性かもしれないが、老後の社会参加には弊害となりかねない。実際、これまで行政によって行われてきた高齢者向け余暇活動は、論理や効率とはかけ離れた「趣味」の類が多く、元サラリーマン男性には適応できない面は否定できない（参考：小室・小西 1996、奥島 1997）。団塊の世代の定年退職を間近に控え、もはやこれまでの老人クラブや老人福祉センターのような施策だけでは、社会参加できない高齢者はますます増える可能性がある。

こうした高齢者の受け皿として注目されているのが、NPOやボランティア団体など、民間のサービスを通じての社会参加である。以下、こうした形態の社会参加に関して、重要と思われる点を提示したい。量的方法によって検証されるのは今後の研究に任せるため、あくまで筆者による聞き取り調査から抽出された「命題」として、ここで議論したい。

### 3. 命題の提示

大都市近郊において NPO・ボランティアなどで活躍する高齢者は、概して「これは仕事じゃないのだから」といった言いまわしで、現在の自らの活動を表現することが多い。それまでの仕事一本やりの思考や行動への反省があり、論理や効率ばかりでは高齢者は活動できないのを自覚していると思われる。次の命題が導かれる。

*命題1：高齢者のNPOやボランティア団体では、現在の活動の指針に関して、企業社会・会社組織をしばしば対極に置く。*

高齢者同士の活動では、体調の問題などで急に都合が悪くなることが珍しくない。かといって、「それぐらいで休むな」という現役時のような態度で接することもできない。むしろ「仕事じゃないから」こそ、もっと気軽に、できる範囲の活動をしようという姿勢がみられる。現役時のように、定期的な目標を置き、無理してでも業務を行うといった姿勢は決して望まれない。

また、所属団体以外での活動も、奨励されている。つまり、当該団体への忠誠心を近い、一番に優先させねばならないような現役時の体質とは、これも異なっている。現に、他の活動や家族との付き合いを大切にするからこそ、できる範囲内で活動をすることが生きがいになると語るリーダーも多い。

現役時の事項を対極に置くのがもっとも明確に表れるのは、肩書きに関する面である。「前歴を問わない」という言葉がしばしば聞かれる。つまり、いくら現役時に「よい」ところに勤めたり、上位の役職に就いていたとしても、それは高齢者のボランティア・NPOには関係ないことである。

*命題2：高齢者のNPOやボランティア団体では、現役時代の肩書きが「意識的に」無用なものとされる例が多い。*

高齢者の団体では、原則として肩書きを明かさないことをうたう例は多いが、それは「肩書きは知らないほうがやりやすい」という理由で説明される。いくら元取締役だろうと元部長だろうと、NPOやボランティア団体の活動に長けているわけではない。肩書きを背負って会社の中でしてきたこと、肩書きを得るためにしてきた努力などは、一歩外に出ると役に立たないことも多いという感覚がある。むしろ、それを自慢し高慢に振舞うことのほうが弊害となるため、団体運営側にすると初めから口にしないことが望ましいという。

しかし、現役時に身につけた役立つ知識や技術は別である。例えば、ITを中心に据えた団体では、現役時の知識や技術をそのまま活かすことが奨励されている。コンピュータ教室などを開催するならば、現役時の職業を公表した上で、それが頼りにされている。

このように、企業社会での経験がすべて否定されているわけではない。むしろ企業という近代官僚制の組織にいた元サラリーマンは、そのエキスを老後の団体に取り入れている。

*命題3：高齢者のNPO・ボランティアなどの団体では、企業組織のエキスが利用されることがある。*

エキスとは、例えば、よく企業で見られるような役職的整備である。監査役の設置、規約の制定などが相当するが、これらを整備している団体は少なくない。企業という組織にいた人間にとっては、いくら仕事ではないNPOやボランティア団体といっても、むげにできない要素なのかもしれない。

また後述の内容とも関係するが、男性高齢者にとって、こうした企業にありがちな要素が存在する場所のほうが、居心地はいいのかもしれない。それらなしに運営される趣味サークルなどは、逆に肌に合わないことも多いようだ。

設立のきっかけについては、その後安定した活動を行っている団体には共通項がある。それは、行政とのつながりである。団体によって様々なつながり方があるようだが、例えば、設立時に市町村や社会福祉協議会から助成金を受けたことや、立ち上げ時にまとまった業務を委託されたことなどがある。

*命題4：安定した高齢者のNPOやボランティア団体には、設立時に少なからず行政の支援を受ける例がある。*

あるいは、自治体の開催した活動への参加をもとに人脈がそろい、それが発展したボランティア団体やNPOになるケースもある。例えば、男性のための介護教室を市町村が主催し、そこに参加した高齢者男性がその後も個人的に集い、NPOを立ち上げた例もある。

高齢者のNPOやボランティア団体を立ち上げるにしても、活動を牽引する人物の存在が重要である。こうしたキーパーソンは、どこの団体でも珍しくないと思われるが、高齢者でしかも元サラリーマンの参加するような団体の場合、専門性を持つキーパーソンが重要な役割を果たすことがある。

*命題5：高齢者のNPOやボランティア団体の設立・運営には、専門性のあるキーパーソンの存在が意味をもつ。*

専門的知識や技術を有する人物の存在は、とりわけ立ち上げ時期や、新プロジェクトの開始時期に重要である。たとえば、キーパーソンが情報通信システムの専門家として現役時に活躍していた場合、コンピュータ・システムの知識を駆使して団体を立ち上げ、コンピュータ利用を前面に押し出す例がみられる。システム運用とまでいくと、もともと現役時代からの経験者でないと、特に高齢者には至難の業である。

また、地域の診療所の女医（内科・小児科）という例も、地縁ベースでの団体を立ち上げるのに貢献したユニークなキーパーソンである。地域の実情をよくわかっており、一目置かれる存在として地域の人たちから信頼を得ており、何か事を進展させる際に責任者として代表になった例がある。

近年の地域参加において注目されるべき側面は、男女差であろう。従来、高齢者のジェンダー問題というと、女性の経済的苦境が強調されるむきがあった（伊藤・伊藤

2002)。しかし、社会参加という側面で見ると、男性は極めて消極的な例が多く、QOLの観点でいえば、男性のほうがずっと深刻な問題を抱えている。

老人クラブをはじめとした高齢者の団体活動では、「男性は参加したがないから」あるいは参加しても「男性はみんなと話すのが苦手だから」といわれることが多い。しかし、そう単純に片付けてしまうのは得策でないだろう。ここではむしろ、男性と女性の求めるものが違うことを提議したい。

*命題6：男性と女性では、適する社会参加の様相が異なる。*

例えば、女性は世間話、趣味活動などを名目として、地域の集まりに参加できるかもしれないが、男性はそういかない例が多い。論理や効率を追求しながら数十年を過ごしてきた元サラリーマンには、目的もなしに世間話をするのは、たとえ引退後でも難しい。

しかし、行政から提供される社会参加には、そうした側面が多いようにもみえる。趣味活動や世間話などをするを目的に、集う機会が設けられてきた感は否めない（参考：奥島 1997）。これは果たして男性の社会参加として魅力的だったのか。

むしろ、筆者の聞き取りから浮き上がってきたのは、男性の社会参加には、使命や責任、またはある程度の目的や社会的意義が必要なのではないかということだ。「俺たちがやらなければ誰がやる」といった感覚である。

*命題7：男性の参加には、「仕事」に近い感覚が有効である。*

たとえば、ときに危険の伴う活動（例：警ら・巡回、藪の手入れ）や力仕事（例：祭りの準備）などには、男性は積極的に参加である。女性高齢者では着手しにくく、かといって若い男性では時間的・知識的に困難な仕事の場合、男性高齢者は使命を感じて、すすんで業務を遂行する。こうした活動を中心に据えるのは、男性を取り込む一つの手ではないか。実際、介護・育児・ボランティアなどでさえ「働くこと」と捉えている男性高齢者は半数以上にのぼるといふ（前田 2003）。

あるいは男性だけの活動も、居心地のよいものとされるだろう。それまであまり同年代の女性と世間話などしなかったのに、高齢になったからといって急に女性ばかりのいるお茶会に出席させても、うまく振舞えるわけがない。それよりも、男女別の集会を提供してあげるほうが、男性にはよほど適応しやすいかもしれない。地域活動参加に消極的な男性の意見として、「女性ばかりだから」という理由は珍しくない。

ところで、元サラリーマンの男性にとって、明確な使命や目的がなく集う場合、誘引となりうる一つに飲酒があろう。仕事一筋できた男性たちにも、無駄話をする機会とし

て、現役時から飲酒の席があった。行政の高齢者むけサービスでは、これまで飲酒はあまり考慮されなかったようだが、自制できる限りにおいて、飲酒は否定的にばかり扱われる必要はないと考えられる。

命題8：男性の社会参加には飲酒の機会が効果を示すことがある。

男性高齢者のNPOの中には、昼間の活動を終えた後に飲酒をする機会を設け、楽しみとする例が見受けられる。これが誘引となって昼間のボランティア活動を行うことも少なくないという。

また団体設立の機会にも、飲酒の機会は役立っている。定年退職後、行政の提供する教室に出席してみたところ、教室終了後に数人で飲酒の席を持ったのがきっかけで、新たな団体の設立に進展した例がいくつもみられる。知らない男性同士でも、飲酒を介してならば無駄話に興ずることが可能ではある。

少量の飲酒が身体的健康によいことは指摘されている（尾谷 1991）。男性は、女性と違って世間話や趣味では参加しにくいかもしれないが、（特に前期高齢者にとって）飲酒が混じれば、参加に比較的抵抗感が少ないだろう。米国などでは治療の一環として飲酒が行われている例もある（関連：阿部 1997）。この効果を見捨てるのではなく、何らかのかたちで男性の社会参加に組み込むことには、一定の意義があると思われる。

#### 4. おわりに

高齢者の社会参加はいかにして行われるか、大都市近郊におけるNPOやボランティア団体への聞き取りを手がかりに、本稿では議論を進めてきた。最後に、こうした実例から、筆者なりに懸念される事項を2点ほど述べ、結びとしたい。

第一に、適切な人員規模の問題である。運営がうまくいくと会員数は増えるのがこうした団体の常だが、増えすぎると「フリーライダー」（free rider）がでてきてしまう。仕事や役回りの行かない会員が増えてしまうことは、会の中での温度差を生じさせたり、余分なコストを引き起こしかねない。

逆に人数が少ないのも懸念の対象である。少人数を保つことは、新入者をつくらないことを意味している。すると不活性化が生じ、若い感覚が薄れるなど、会の高齢化の問題が生じてくる。

適切な規模を保ちつつ、活動を常に活性化させておくことは、現時点で活発な団体であっても簡単なことではない。

第二に、こうしたNPOやボランティア団体が近場に存在しても、関心も示さないままの人が一定程度いることである。

本稿で提示した命題群は、いくなれば社会工学的に今後の政策や実践において貢献できる部分がある。例えば、団体の立ち上げにはある程度の行政の支援が有効であること、男性と女性の参加しやすさを考慮し、男性むけの活動を提供してみることで、男性の活動には楽しみや趣味よりむしろ使命感や責任に近いニュアンスで訴えること、などが抽出されうる。これらは、もちろんすべてのケースではないにせよ、実践においてある程度の効力が予想される。

しかし一方で、これらを実践しても不十分なこともある。それは、いくらNPOやボランティア団体が設立・運営されようとも、恩恵を受けない層が必ず存在することである。たとえ同じ地域に住み、家族構成や家計状況が似ており、同じように元サラリーマンだとしても、すべての人が参加するわけではない。

行政サービスの充実化は、これまで恩恵を受けなかった層を社会参加させることなのか、それともこれまで参加していた層にいつそう充実した環境を提供することなのか。少なくとも、これまでの社会参加施策は後者に偏っていた感が否めない。例えばNPO活動の促進といっても、恩恵を受けるのは多くの場合、すでに参加している人たちであろう。そこからもれている層、つまりNPOやボランティア団体に興味を持たない人々に、どういった社会参加の機会を提供することができるのか。また、彼らの特徴は何なのか。彼らこそがより深刻な意味で、QOL対策をせねばならない対象なのかもしれない。今後も検討してゆくべき課題である。

注

- i 高齢者に限らないNPO論はさかんに研究対象になっている。例えば、塚本ほか(2004)は、NPOを様々な側面から論じている。

#### 【引用文献】

阿部俊子 1997「諸外国の老人ホームにおける飲酒の実態と規制について」『食生活科学・文化及び地球環境科学に関する研究助成研究紀要』13: 65-72.

福原正弘 1998『ニュータウンは今』東京新聞出版局

伊藤純・伊藤セツ 2002「ジェンダーに区分した高齢者の経済状況の把握」『学苑』740:

75-92.

小室豊允・小西康生編 1996『老人の社会参加』中央法規

近藤勉・鎌田次郎 2004「高齢者の生きがい感に影響する性別と年代からみた要因」『老年精神医学雑誌』15(11): 1281-90.

前田信彦 2003「高齢期における多様な働き方とアンペイド・ワークへの評価—男性定年退職者の分析」『国立女性教育会館研究紀要』7: 21-31.

奥島繁 1997「福祉コミュニティ再編のためのサロン活動」『月刊福祉』80(13): 36-41.

尾谷良行 1991『生涯現役スポーツライフ』大修館書店

斎藤嘉孝・近藤克則・吉井清子ほか 2005「高齢者の健康とソーシャルサポート」『公衆衛生』69(8): 661-665.

塚本一郎・古川俊一・雨宮孝子 2004『NPOと新しい社会デザイン』同文館出版

植村尚史・斎藤嘉孝 2005「都市近郊在住高齢者の生活スタイルと介護需要」白波瀬佐和子編『介護サービスと世帯・地域との関係に関する実証研究』厚生労働科学研究費補助金

## 第8章 注目される社会活動の例：ヒアリング調査の結果から

高齢者の地域参加・社会参加に関して、当研究班では2005年度に複数の団体を視察し、ヒアリングをおこなってきた。ヒアリング対象としての選定条件は、高齢者と関係ない活動をしていようとも、主たる活動が高齢者自身によるものであり、在宅よりもむしろ社会参加を軸にしていることである。

対象とした団体の種類と団体名、所在地はそれぞれ以下のとおりである。

- ・ボランティア団体
  1. ダンボ青葉（神奈川県横浜市）
  2. いたか（神奈川県横浜市）
- ・NPO法人
  3. シニアSOHO普及サロン（東京都三鷹市）
  4. コネット（神奈川県藤沢市）
- ・福祉関連団体
  5. シルバー人材センター（埼玉県所沢市）
  6. ケアセンター成瀬（東京都町田市）
  7. 長生クラブ（埼玉県所沢市）
- ・生協福祉
  8. 神戸生協（兵庫県神戸市）
  9. 仙台生協（宮城県仙台市）
  10. 桜ヶ丘デイサービス（宮城県仙台市）

本章では、それぞれの団体について、設立・いきさつ、組織（人数、財政）、モットー・理念、現在の活動、地域的背景、効果・評判、問題点と今後、に関して記述してゆく。以下は、筆者らによるヒアリングと対象団体から得た資料等に依拠している。

### 1. ダンボ青葉

#### （1）設立背景

「ダンボ青葉」は、横浜市青葉区に在住する男性高齢者によるボランティアグループである。ダンボ青葉の設立には、行政が大きく関わっていた。平成13年8月、青葉区の社会福祉協議会が、地域住民の男性のために「男のための介護体験教室」を開催した。参加の対象だったのは60歳以上だった。26名が参加したが、そのうち16名で教室が終わった後に飲酒したところ、その席の中で「何かやりたい」という声が上がった。現



在のダンボ青葉の代表者が世話人となり、各地でヒアリングを行うなどして、先進事例を学び、当団体の設立を実現させた。

## (2) 組織

現在の会員数は24名である(2005年6月26日ヒアリング時点)。設立当初よりも会員は増えたが、それは口コミで後々入会した会員がいるためである。会員の年齢は60代前半～70代後半であり、みな定年退職をした男性である。育ちは青葉区とは限らないが、現在すべては青葉区に居住する人たちである。

組織としては、会長、事務局、会計、会計監査など、役割分担が行われている。当会には規約も存在する。

運営費用は、①社会福祉協議会からの寄付、②赤い羽根共同募金からの寄付、③会員の年会費1,000円の3種類である。

## (3) 理念・モットー等

「仕事とは違う」という言葉が何度かヒアリングの中で出てきた。「無理なく、できる範囲で、楽しく」活動するのがモットーだという。それも「人に喜ばれること」をすることが強調されている。

当会では、現役時にその人物が何の職業に就いていたか、あるいはどんな役職にいたかといった、経歴を問うことは基本的にない。互いの現役時の職を知らない間柄も珍しくない。それよりも「今何ができるか」が重要であるという。

## (4) 活動内容

現在の活動は、定例会という月2回の会員の会合によって維持されている。定例会では、各会員に対して、ボランティア活動の割り振りが行われる。

ボランティア活動は、おおよそ月7回ぐらいが平均的である。主な内容は以下のとおりで、地域の福祉活動を中心に多岐にわたっている。

- 中途障害者地域活動センター「青葉の風」における軽作業や交流
- 小中学校における福祉体験授業(例：車椅子体験)の支援、先生と企画、生徒との交流

- 地域のケア施設（ケアプラザや老人ホーム）における花見、縁日、祭りなどの行事のサポート
- 福祉団体などが企画する運動会、食事会、映画会などの行事の支援

当会は、自分で探す活動よりもむしろ、行政から委託される活動が多い。「行政とは持ちつ持たれつの関係」という声も、会員から聞かれる。

#### （5）地域的背景

横浜市青葉区のいわゆるニュータウンに存在するため、当地域には都心に通うサラリーマンが多い。もともと土着で何世代にもわたって築き上げたネットワークは特別に密なわけではない。自分の代に移り住み、定年退職後になって人間関係を作り始めている男性が少なくない。

#### （6）効果等

サービス受領側の行政施設や小中学校から受ける当会の評判は、おおむね肯定的なものだという。行政からの依頼は、決して減ることがない。

また、会員当人たちの間の評判もすこぶるよい。途中で退会する者はほぼいないし、登録だけして活動に出てこないような会員もいない。おおかた皆が満足しながら活動をしている。

#### （7）問題点と今後の活動

当会は、男性のみで編成されているが、あえてヒアリングで「女性の参加を受け入れたいか」と尋ねてみた。しかし、女性のいないことが自分たちの活動をやりやすくしているという見解が強い。「女性が入ると空気が変わる」ので、今後も女性を入れる予定はないという。

会員の人数は、会員には「ちょうどよい」と感じられているようである。現在の活動内容をかながみるに、現在的人数は「大きすぎず小さすぎず」であり、当初からの会員数と比べると徐々に増えているものの、特段に規模を拡張する予定はない。これ以上大きくも小さくもないほうがよいという。

## 2. おやじの会「いたか」<sup>1</sup>

### (1) 設立背景

全国のおやじの会の草分け的存在である「いたか」の発足は、1983年である。神奈川県川崎市に本拠地を置く「いたか」の設立のきっかけは、高津市民館と菅生こども文化センターの共同企画「父親学級」であった。当初は自発的に参加するのではなく、女房にしつこく言われ、いわば“参加させられた”メンバーであったが、父親学級終了後に意気投合し、自主的に集まろうということになった。

会の名前の由来は、毎日、仕事、仕事で家をあげがちな父に向かって、たまの休みに子どもから発せられた“おっ、居たか”である。高度経済成長以降の都市部周辺におけるこのような典型的なサラリーマンの生活形態は、配偶者である女性の勉強会等において、頻繁に出た問題点であった。勉強会を通じて語られる女性の生き方や子育ての方法のどちらについても、最終的に障害となってくるのは共同生活者である、亭主の存在であった。自分はちゃんと仕事をしている、これ以上何をさせようというのだ、と渋る亭主の“仕事オンリー人生”を、近隣地域の活動への参加などを通じ改善し、仕事以外の生きがいを見つけてもらおうとして、女性たちは自分の亭主を父親学級に参加させた。

このように、無理やり参加させられた男性たちであったが、回を重ねるごとに彼らの状況は変化し、“しぶしぶ”から“いそいそ”と出かけるようになっていった。そして4ヶ月間続いた父親学級の終了時に、せっかく知り合ったのだからこれからは自主的に集まろう、ということになり、「いたか」としての活動に結びついていった。

### (2) 組織

定例会が中心となる「いたか」では、毎回の参加者が約10～15名ほどとなっている。また、地域交流やまちづくりのボランティア活動グループと位置づけられ、年会費等も存在しない。

### (3) 理念・モットー等

そもそも親父たちの家庭での居場所づくりから始まった「いたか」であるが、時代とともに成熟していった活動は、自分自身の存在そのものを見つめるという方向に向かっていく。そして、このような課題を地域の中で考えていくということが主になっている。

#### (4) 活動内容

「いたか」の原点でもあり、また現在の主な活動となっているものに、毎月第2土曜日の定例会がある。一品料理持ち寄りにより、菅生こども文化センターにおいて行われるこの定例会は、知識・教養を深めるといった勉強会的要素を含むものが多い。

これまで22年間にわたる定例会のテーマは多岐にわたっており、第一期とされる最初の3年間(1983～1986年)では、「会社人から家庭・地域人へ、親父の居場所と仲間作り」というテーマが中心で、メンバーそれぞれが報告を行った。また、有識者を招いての勉強会といった形もあった。

第二期である1987年から1991年にかけての4年間は、家庭・地域・学校における連携の重要性や父親のあり方についての勉強会が主であった。さらに第三期(1992～1999年)になると、夫婦が向き合っ地域を生きるという共生の視点に基づいた、女と男のまちづくりにテーマが発展した。さらに第四期である2000年からのテーマは、地域で磨く、地域でつなぐ世界を見つける、というように、グローバル化する社会における地域の役割についての検討が行われている<sup>ii)</sup>。

以上のような定例会のほか、小学生との多世代交流、地域の歴史散歩、ガレージセール、区民際や花見など、様々な地域交流・貢献を果たしてきた。

#### (5) 地域的背景

設立そして主な活動場所がベットタウンである川崎という土地柄、「いたか」の活動メンバーのほとんどがいわゆる“川崎都民”で、周辺住民の多くはサラリーマンとその家族、そして都心に通勤し、都心で買い物をするといったライフスタイルを送ってきた人々である。

#### (6) 効果等

近隣地域を含む「いたか」の評判は、すこぶる高い。長期間にわたって行われてきた定例会は、時に新聞やテレビ、そして婦人誌などに取り上げられ、その活動内容が紹介されている。また、平成17年度において内閣府が発行する「高齢社会白書」においても、「いたか」の活動が紹介され、高齢者や今後高齢を迎える地域住民の学習および社会参加の代表例として、取り上げられた。さらに、「いたか」現世話人が川崎市宮前区の区長として就任され、「いたか」の地域における貢献度・信頼度が更にますと予想されている。